
俺がちっさい訳じゃない！

真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺がちっさい訳じゃない！

【Nコード】

N1791Z

【作者名】

真

【あらすじ】

特殊能力を持つ家に生まれた天才児・桐山尊きりやま・たけるが、ある儀式の最中に気がつけば空の上！？

まっピンクのトカゲを下敷きに着地したのは、地球ではないどこか。

とりあえず、年相応に見てもらえる世界に早く帰りたいです。

*主人公は最初から強いです。能力的にはほぼ成長しません。

* yahoo小説にも掲載しています。

第一印象は大事です。(前書き)

投稿し始めたばかりです。

とりあえず勢いで！頑張ります。

第一印象は大事です。

日本のある山の中腹にある邸で、火の手が上がった。

麓の人間たちは火の手が上がったことによつて、そこに邸があつたことを初めて知ることになった。

だが、そこに誰が住んでいたのか。

何故火の手が上がったのか。

犠牲者がいたのか。

そのことは、誰にも知らされることなく処理された。

俺、何かしましたか。

いや、誰にも見られてないしとか思つて、儀式中にすべきことはしなかつたけど、それガキの時に終わってるし。繰り返す必要はないよね!?

いいじゃんちよつとぐらい高い壁登りたいなとか思つても!だって男の子だもん!

とか思つて現実逃避してたら近づいてきてますよ。何がって?!

J I · M E · N ! ! !

「ガルミシユラ国領になっているとは思うが、ほとんど手は入っていない。」

「待つて。もう一回お願いします。」

「……グランフェール大陸ガルミシユラ国領の、北の森だ。」

「……どこさ？」

え、まてまてまて！記憶喪失？

いや俺は桐山尊歳きりやまたけのは17。日本人でちょっと変わった古い家の次期当主。

普段は高校生。友人多め。成績可もなく不可もなく。

今日は当主になるための第一儀式の日。だけど、昔こっそり一人でやって成功させたことのある儀式だから、やらなくていいかと大和を創る儀式を行っていた。

大和が生まれてよっしゃ成功！とか思っで、思っで……それから……？

「おい！」

「う！？あ、ご、ごめんなさい。ちょっと考え事して……。」

「いや、まあ、それはいいが……。」

大丈夫かと問われて、とりあえず頷く。何が大丈夫なのか、何故聞かれたのかもよくわからないけれど。

「とりあえず、此処が地球じゃないことはわかった。」

「チキユウ……？」

うんその反応からしてもね！泣きたくなる反応ありがとう！

でもよく見ればおにーさんの服装は冒険者×旅人÷2みたいに見えるし、髪夕日色の瞳は月色って日本じゃ見ないけど日本語ペラペラ

！……俺混乱してた！見ればわかるじゃん！！

その腰に佩いているのは剣の鞘？剣本体はおにーさんの後ろの暗紫色のトカゲの死体に突き刺さっているあれですか。そーですか。銃刀法違反とかない世界ですか。銃ってあるんですか？いやその辺重要じゃねえ落ち着け俺。

「おにーさん、時間ある？」

この世界を知るためにも、お兄さんにいろいろ教えてもらいたいんだけどいいかなあ？

あ、人の精いつぱいの笑顔に逃げようとしなくてもいいじゃん！逃がさないけどね！！

第一印象は大事です。（後書き）

批判は苦手ですが、感想や誤字脱字は頂けると嬉しいです。

術とは何ぞや。大和って誰さ？（前書き）

連続投稿です。

とりあえず今日は二つで。

術とは何ぞや。大和って誰さ？

「とりあえず、ガルミシユラ国の王都ハーゲンに行けば国立図書館があるから、そこへ行こう。何か手掛かりがあるかもしれない。」

おにーさんはクルシユオル「アウグラさんというらしい。シユオルさんでいいか、長いし。

俺は尊たけるという名だと自己紹介すると、少し言いくそくに口の中で何度か繰り返していた。名前が横文字の国の人には、日本語名は難しいってホントなんだなあ。

シユオルさんには俺が異世界人だってことを洗いざらい話して、畳みかけてちよつと術も見せて納得してもらった。

その時にまた“神子じゃないのか？”って聞かれ、違つと念を押さなければならなくなつたけれど。

俺の言う術って言うのは、俺の家に伝わる『仮名使い』だ。

仮名っていうと平仮名とか片仮名とかを思い浮かべるかと思うんだけど、それだけじゃない。

仮名＝文字という認識だからだ。つまり漢字も英文字も、とにかく書くものなら何でも使う。

文字の意味さえわかっているれば使えるのだから、変な話楔形文字とかも使おうと思えば使えるのだ。

まあ、俺の知る限り漢字を使う奴が多かったけど。あとは平仮名で、その仮名を使って何をするかということ、簡単に言えば超現象を起こす。

……あ、うさんくせ〜とか思っただろ？わかってんだよ。でも出来る以外は普通の人間なんだぞ！

生まれりや泣くし笑うし怒るし乳を飲んで育つし、普通に学校にも通うし、結婚して子供作って、んで墓に入っていく。その間にちよつとばかし変な力があるだけさ。

スプリンターが体を鍛えたり、学者が研究したりするのと、力のある子がそのコントロールを学ぶのはそう違わない。

……話がそれた。元に戻そう。

超現象っていうのは、もつと簡単に言うと火をおこすとか、水を出すとか。

『仮名使い』と呼ばれる者は、そういうことが仮名を書くと出来るってこと。

もちろん普通に手紙を書いたりする時にそんなことが起こったらずいたため、力のピン錐に限らず有る者はコントロールを徹底的に叩き込まれる。

俺は本家の長男で、だからってわけではないが力があつた。まあ天才だからコントロールなんてすぐ覚えたけどな！

……嘘ですすみません。中学上がるまで外に出れないくらいにはかかりました。

その分、力は桁外れというか、規格外らしいんだけど。その話はまたの機会に。

初対面に話していいものかちょっとはためらったが、もしどうにかなっても何とかできる自信はあるし、これでも人を見る目はあると自負している。

人を見る目は必要だったからな。

そうして“帰るのに必要な情報”が足りないのでそれを集めたいと言うと、シユオルさんは“帰る方法”を探すと思ったのか、国立図書館に連れて行ってくれと言ってくれた。

自分も王都が目的地だからと。

やっぱりいい人だな。場所教えるだけでさよならもできるのに。

「だが、まずは服をなんとかしないと。お互いに。」

「そうだね。俺のこの服は動きづらいし、シユオルさんのはトカゲまみれって感じた。」

「……すごく嫌な表現だぞ、それは。」

あれそお？でもホントのこと。俺は儀式の間に籠こごっていたから浄衣じやうい姿だし、シユオルさんは返り血か、紫とも赤ともつかない色の液が身体の右側にべったり。

これが赤だったらスプラッタなんだろうけど、この色じゃあ汚れているようにしか見えない。

「東に進んだところに村がある。そこに宿をとっているから、まずは戻るぞ。」

「うん。」

頷いて太陽の位置を確認していると、シユオルさんは懐から少し大きめのナイフを取り出し、トカゲの体を解体し始めた。食うのか？

「魔物を倒した証拠になる部位をギルドに持っていくと金になる。ヨーウィーは腹に石が入っているんだ。一生体内に入ったままの石だから、魔力も帯びる。この大きさのヨーウィーなら、良い値がつくだろう。」

このトカゲはヨーウィーって魔物なのか。

この世界には魔物がいて、それを倒す仕事をしている人がいて、それを推奨している組織もあると。

「もう一匹いたのは・・・何かに食べさせたんだったな？」

「へ？」

「お前が降ってきたときに下敷にした、桃色のヨーウィーだ。」

桃色・・・ああ！あのシヨッキングなピンクの物体！

え、ヨーウィーって色が何色もあんの？あれってそうだったの？ええええええええ・・・大和、石だけでも吐けないか？

・・・そつか、吸収しちゃったか・・・。

「・・・ごめん。」

「いや、タケルが降ってきたことで助かった。腕を犠牲にするところだったからな。金も十分にあるし、そこだわるものでもない。」

「いやでも、しばらく俺って文無しだろうし、迷惑掛けるのにさあ。

・・・

「モンとは金のことか？子供が心配するな。」

ありがたいけど・・・はたして俺がいくつに見えているんだろう？一応18歳ですが、東洋マジックは異世界にも通じると言うのか！？

おにーさんの年齢が気になってきたよ。おいくつですかね？20歳前後だと見ているんだが、どうだろう。

まアそう重要でもないからいいか。俺がチビなのは今に始まったことではないしな！・・・・orz

「何に食べさせたのか聞いても？」

「大和？大和は俺の子供みたいなもの。自分の力を試したくて創り出した、ええと・・・正確には違うけど、生きものだよ。俺が生きている間は俺とずっと一緒に居るんだけど、今は姿を現してないから人には見えないんだ。見たい？」

「・・・・いや・・・・すまん。聞いておいてなんだが、俺には理解できないようだ。」

「そう？そうだね、俺の友達だとも思ってくれれば。人ではないけど。」

生まれたてほやほや！なんてったって、此処に来る直前の、儀式をするべき時間に創ったのが大和なんだから。

聞けばびっくりするような正体だけど、今はまだ赤ん坊。どう成長していくか楽しみにしてるぞ？大和

今流行のモンハ てやつですね。(前書き)

初めて能力使用してます。

今流行のモンハ てやつですね。

たどり着いたのは長閑な村でした。洋風の。あんまり見ないなあテレビぐらいでしか。きよろきよろしてしまっ俺って不審？

「先に宿へ。その後ギルドへ行つて、服屋だ。」

「了解。あんまり注目されないもんだね？」

確かに近くの人は見えてくるけど、すぐ日常へ戻ってしまう。

「魔物の返り血に汚れた冒険者は多い。タケルの恰好は珍しいが、服装ぐらいで注目するものでもないな。」

大雑把だ。でも魔物とかが出たわけでもないし、一応人の形をしているし。

いや、俺は人だよ？人じゃないの？って感情よこさないで大和でも、人って見た目だけで安心も警戒もするものだからね。

「此処だ。」

そう広い村でもなく、すぐ宿に付いた。アットホーム感があふれる宿だ。こういうところ好きだな。

宿の中を見回しているうちにシュオルさんは話をつけたらしい。俺が増えたためか部屋を取り直し、荷物を移し、すぐに着替えた。

「風呂は入らなくて大丈夫？」

「今の時間厨房は夕食の準備で忙しい。湯を用意してもらおうのも悪

「いだろう。」

「もしかして、別の場所で大量にお湯を沸かして用意する？」

「それ以外に方法があるのか？」

なるほど。どつかに大浴場みたいなのがあったりするかと考えていたんだけど、そこまでなっていないのか。数日に一回入る感じなのかな。残りはタオルで拭くだけとか。

「じゃあ俺が用意するよ。シュオルさん頭からかかってたでしょ？髪と顔ぐらい洗いたいんじゃない？」

「だが……」

「だいじょーぶ。俺は厨房も薪も竈も使わないから。大きな盥と水ある？」

不思議そうな顔しながらも用意してくれる。やっぱりいい人だなあ。たしか懐に入れていたはず……。あつた。この符が全部なくなる前にお金作って紙と筆買わないと。

無くてもできるけど、あつた方が考えなくていいから楽だしね。

温 の字を使う。

「……ん、これぐらいかな。温度確かめてもらえる？」

「……温かい。紙を沈めただけなのに……？」

「俺は仮名使いだつて言ったでしょ？これぐらい出来て当たり前だよ。」

「カナツカイとは、すごいな。」

そんな心底感心するような顔で言われると照れます。シュオルさんも懐深すぎ。知らない力を見せられて“すごい”の一言で済ませられるって、どれだけ人ができているんだか。もっと怖がったり気味悪がったり疑ったりって無いの？

「助かった、ありがとう。もう少し待っていてくれ。」

「しっかり落とした方がいいよ。お湯がもつと欲しくなったり、ぬるくなったら言うて。」

「ああ。」

タオルで拭くだけじゃあやっぱり限界がある。はっきり分かるくらいに水の色が変わって、もう一度お湯にしたものと交換して、腕や上半身もついでのように拭いてからシュオルさんは服を着なおした。さっぱりした顔をしているね。符を使った甲斐もあるってもんだ。

「待たせた。出よう。」

「了解。次はギルドだよね？」

「そうだな。換金するものもたまっている。」

少し袋の中を見せてもらったけど、乾燥した尻尾らしきものや耳らしきもの……そりゃ、小さい方が持ち歩きやすいけど。いっぱい見たいもんでもないかなあ。

でも稼ぐ方法では一番手取り早いかも。商売とかやるには、元手がないしね。

文字と文って違うよね。(前書き)

私は国語は得意でしたが、第二国語は苦手でした。
皆様はどうでしたか？

文字と文って違つよね。

ギルドはなんていうか、想像通り？

掲示板が出入り口の横にある木造の建物にシュオルさんはためらいなく入って、俺も後に続く。

イスとテーブルがいくつかある休憩所？ロビー？みたいな場所に促されて、座って周囲を観察した。

やっぱり男の人が多いなあ。

シュオルさんが標準だったらどうしようかと思っただけど、彼の容姿は上の上らしい。普通におっちゃんとか、くまとか、ゴロツキっぽいのかいる。

俺ぐらいの外見年齢の奴もいるにはいるけど、弟分というか下っ端というか、そんな感じ。

なるほど、俺もああ見えるんだ。

装備も様々。シュオルさんは確か胸当てとマント、手甲と脛当て、そして剣1本。

動きやすさを重視？軽装すぎじゃね？

西洋の鎧に似たものを着ている人もいれば、弓矢を持っている人もいる。

魔法使いとかはいないのかな？

「悪いな。」

「見てるのも面白いよ。ちょうどいいや、ギルドの仕組みってどんなん？」

そんなに混んでもいないし、戻ってきたシュオルさんに椅子を勧め、ギルドを見回せるよう体を向けて尋ねる。

シユオルさんも知っておいて損はないと思ったのか、すぐに話し始めてくれた。

「ああ。まず、ギルドを使用するのは2種類の人間がいる。」

「ええと、お客と売主？」

「そうだ。依頼者と受注人といった方がわかりやすいか？ギルドはある程度の大きさの集落にはある。

依頼人はそこに依頼を持ち込んで、人手を探す。

受注人の方は、自分の力で解決できるものの中から仕事を受ける。

依頼は誰でもできるんだが、受注はギルドに登録する必要がある。」

「登録は誰でもできない？」

「いや、名前があればいい。ただ、ランクを管理するのに必要なんだ。」

「ランクが上じゃないと、難しい仕事は受けられないってこと？」

「ギルドは依頼関係で成り立っているからな。依頼者が自力で探すよりも確実に、相応の人手を見つけられる場所でなければならぬ。だからギルドに登録して、こなした仕事の種類と量、成功率からランク分けをする。」

すぐくわかりやすい説明だ。慣れているのかな？

「あの掲示板が仕事？」

「そう。板ごとにランク分けしてあって、ランクはE〜SSまである。」

「……E〜Sまでしか掲示板には無いの？」

「理解が早いな。SSランクの仕事はほとんどないから、あっても本人に口頭で伝えられる。」

そもそも、SSランクが世界に5人ほどしかいない。」

それは、その人たちが飛びぬけてるってことか。会ってみたいなあ。

「タケルも登録しておくか？」

そうだなあ。何時までここに居るかわからないけど、名前だけでないならやっておいても問題はないか。

「うん。あっちの窓口？」

「ああ。」

壁に並んでいる窓口の、一番出入り口に近いところを指すと頷かれた。もう一度確認。うん。

「シュオルさん、俺、字わかんない。」

こちら第二の国語、英語も怪しい！8歳だ！ミミズのものだったよ。うな文字なんぞ読めるかあ！

ちょっと聞きたいことがあります。

とりあえずシュオルさんに代筆してもらい、俺はギルドカードというものをもらった。

これにランクとか、こなした仕事のこととかが刻まれていくらしい。無くしたら再発行は可能ですか。まア無くさないけど。

「後で本屋にも寄るか。」

「お手数おかけします。」

図書館行っても、読めなかったら意味ないしねえ。なんで口語は通じるんだろ？

ほんと、シュオルさんって面倒見いいなあ。日常生活でも苦勞してるんじゃないだろうか。今現在苦勞をかけてる俺が言うのもなんだけど。

とりあえず服屋ではおばさ……げふん、おねー様方に膝上半ズボンを着せられそうになるのを断固拒否し、七分丈ズボンとTシャツ、カーディガンのような上着を買ってもらった。

体は子供、頭脳は大人な某名探偵を今ほど尊敬したことはない。あれを着たら羞恥で死ぬる。

ましてや似合うとか言われてしまったら生き返れない。

そこで実は俺が履いているのが靴ではなく足袋だと知ったシュオルさんは、すごく怖い顔をした。

「なぜ言わなかった。」

「いやあの、忘れてたと言いますか」

「知っていれば外を歩かせたりしなかったというのに。」

「歩かないと買い物に行けないよ!？」

「タケルを抱えるくらいわけではない。」

「いやいやいや、抱えられて移動とかあり得ないから!」

シユオルさん俺を何歳だと思ってんのホント!?

ぐったり疲れつつも走れメロスみたいな靴を買ってもらった。足袋
って足底少し硬いから、あんまり気にならなかつ……。ごめんな
さい。

げふんげふん、え……。本屋ですよ。本は本だけでも、書いてある文字がなあ。

「書き方練習の本ってある?」

「……。さあ?」

「おいっ!？」

いきなりのボケに突っ込み入れちまったぜ!本屋って言ったのはシユオルさんだろ!

「店主に聞けばわかるだろう。」

「それもそうか。」

自力で見つけようとは欠片もせずに、かきかたよみかたの本ゲット。
どこの世界でも作りはあんまり変わらないみたいです。

そうやって買い物をしていると村に戻ってきたのが結構いい時間だったらしく、辺りが闇に包まれ始めた。

家から漏れる明かりが、夜道を照らしている。街灯はないけど、結構明るいな。空気がきれいなのか。

「そろそろ戻るか。夕飯もできているだろう。」

「そーだね。久しぶりの御飯だなあ。」

「久しぶり？」

あ。ついつつかり。儀式のために精進潔斎とか言われて、昨日の朝から何も食べてないんだよね。

あいつら俺のへそくりおやつまで取り上げやがって……っつ！でも、そんなことシユオルさんに言ったらまた怒られそうな気がする。心配してくれるのはありがたいけど、俺にとっては慣れたことだし……。

「なんか別世界に来ちゃったりとかいろいろあったから、ずいぶん食べてないような気分になっただけ。」

「そうだな。あの宿は飯が美味い。この村に来る時はあそこがいい。」

「それは楽しみ！」

よし！上手く誤魔化せたな！

ちょっと聞きたいことがあります。(後書き)

おねー様方はきっと似合うと思うてくれたに違いないです。

ふぁんたじー＝魔法じゃないようです。

確かに宿の飯はうまかった。パンとビスケットの中間のようなものとスープがよく合って、野菜も新鮮だし、肉もちよっと濃いめの味付けだったが生臭さは消されていたし。

食の好みで困ることはなさそうだ。ただ、米は恋しくなるかも。

1人分には十分だが2人分には足りない保存食などを買い揃え、2日後。村を出る前にギルドに寄る。

周囲の魔物の出現率や種類、新種の情報はるか確認するためだそう
うだ。

「そういえば、魔物って何？」

「は？」

「いや、体が大きい動物と何が違うのかなーと。」

まだでつかいトカゲ（死体）しか見ていないし、生きている動物もあまり見ていない。犬とか猫は同じだったけど。

「魔物は魔力を持っていて、それを使って生きている生き物、だな。」

「

「マリヨク。」

「特殊な力だ。火や水を操ったり、一瞬で壁を作ったり、体を大きくしたり。」

それ全部できるんだが。

いや、俺は異世界人＆仮名使いだからいいとして、特殊な力、ねえ？

「それを持っているから、退治依頼があるの？」

「いや、退治依頼は普通、何らかの形で人に害を与えると判断された生き物に出される。人里に出てしまった熊なども依頼されることはある。が、大抵は自分では何とかできずに依頼してくるわけだから、魔物が多いな。」

なるほど。ほんと、シユオルさん教師じゃないの？説明上手だなあ。

「人は魔力を持ってないの？」

「……人か魔力を持つと、それは神子と呼ばれる。」

……え、説明それで終わり？その後にく言葉があるだろうと思って待ってみたのに。

シユオルさんを見上げると、少し遠くを見るような眼をしていた。眉もかすかに寄っている。

これは、3日程しか付き合いない俺が聞く話ではなさそうだ。今はやめておくか。

そう言えば最初に『神子か』って言われたな、俺。特殊な力、ね。何となく認識した。

魔法使いはいない、と。中途半端なファンタジー世界だなあ！あ、ごめんなさい嘘ですごめんなさい。調子のりましたごめんなさい。

「……知り合いでも見つけたの？って顔じゃあないな……。」

シユオルさんが突然振り返って、すれ違ったおじさん達を追いかけた。鬼気迫る顔で。

親の仇を見つけたと言われても信じるぞ、あの顔。美形は整っている分、こわいねー。って

「ちよっ！何してんの!？」

追いかけたおじさん達に、難しい顔で話を聞いていたかと思うと、シユオルさんはいきなり胸ぐらをつかみ上げた。

何言われたんだ!？つかまれていないおじさんも話を聞いていたはずなのにびっくりしてるよ？

「……………なんでもない。すまなかつた。」

そんな苦々しい顔で言われても……………まあ、おじさん達は反撃せずには逃げるだけにとどめてくれたけど。

「…………シユオルさん、どっかで何か飲めないかなあ？俺、出発前に喉乾いちゃった。」

「…………そうだな。何か飲もう。」

とにかく落ち着くことが正解だよ。話せることなら聞くし、話せないなら聞かないしさ。

ふぁんたじー＝魔法じゃないようです。(後書き)

主人公は待てる子。

育成ゲームならステータスの最後らへんの。

あの後少しお茶を飲んで、村を出た。特に話されることもなかったから、俺には話せないことなんだろう。

何時か聞けるといいけど、まアそれはいいや。

シュオルさんが黙りこくっているので、俺は周囲の風景を楽しむことにする。

道は舗装されていないけど、結構平らだ。馬車かな？車輪の跡はある。

右側は森。左側はゆるい傾斜で、下には畑。でもあんまり手入れはされていないな。

道を歩いているのは俺たちだけ。そんなに早くも遅くもない時間だと思っただけど・・・村から村への移動って、そんなにしないのかな？

「・・・どうした？」

おっ？シュオルさんが思考の海から戻ってきた？

「人がいないな」と思った。普通のこと？」

「・・・魔物が出ると言っていただろう。」

あれっ？あゝ・・・そっぴやギルドで出沒率聞いた時に、受付のおねーさんが言ってた、かも？

村の南になんとかつていう魔物の群れが出沒するようになって、この道はあんまり使われていないんだっけ？

出発前の出来事が衝撃過ぎて忘れてたよ。ってか、遭遇しても何と

かなるだろうとか思ってあんまり聞いてなかつ……こほん、周
囲のことがまだもの珍しいお年頃だからなあ。

「……………それに加えて、昨日神子が出発し
たらしいからな。」

「え？」

神子が出発？

「神子を通つた道をすぐに歩きたがる人間は、何か特別な理由があ
るか、死にたがりか、だと言われている。」

「ちなみに俺たちは？」

「死のうとは思っていない。」

安心だね。死にたがりには見えないけど、もしそうなら俺と一緒に
居ることは邪魔以外の何物でもないもの。

だって俺は死ねないし、目の前で知り合いに極力死んでほしくない
し、恩人ならなあおさら。

「この道が王都に一番早く、俺は神子を追いたい。だからこの道を
選んだ。」

「なるほど。その理由なら、この道以外を選ぶ方がおかしいね。そ
れで、どうして他の人は神子の通つた道は歩きたがらないの？」

普通神の子なら逆じゃね？恩恵にあやかりたいとかさ。それともな
に、恐れ多くて、つてやつ？

「……………神子が魔力を持つことは話したな。」

「聞いた。」

「人の魔力は、魔を寄せる。」

「ま？」

「魔物はもちろん、水害や干ばつなどの天災、盗賊などの人災、馬車の暴走や積み荷の落下といった事故など、様々な“悪い出来事”だ。神子の近くにいれば巻き込まれると考えられている。」

・・・・・・・・・・・・・・・・はあ、なるほど。

「つまり、神子って運が悪いんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

えっ、聞いた限りではそうとしか言いようがない！？そりゃ天災までおこっちゃうってのは大規模だけど、周囲にそうとらえられていることも含めて運悪いよそれ！

そ、そんな信じられない言葉を聞いたような眼で見なくてもいいじゃん！！

「・・・・・・・・つくつ、は、はははははっ！」

「!？」

「そ、そんな結論が出るとはっ、つくつく・・・」

そんな、腹抱えて涙流すほどのことを言ったかあ？

そりゃあ、ここでは“神子を中心に悪いことがおこる”って言うのが常識かもしれないけどさ、俺はこの人間じゃないし。

今並べたてられた大体のことに対応できる・・・っていうか、この世界の魔物を引き寄せるのはまだ無理だけど、他のことならやろうと思えばできるんだよな、俺。

引き起こす力があるなら、対処もできなきゃならんだろう。とーぜん。

自分のことは自分で始末できるようにならないといけないんだからな、大和。

心で言い聞かせると尊敬に彩られた納得の返事がきて、ちょっと気分が良くなっているところで、シユオルさんに撫でられた。

「……いやあの、ほんとに俺をいくつだと思ってるんですかね・・・。」

別に、嫌じゃあないけど、さすがにこの年で撫でられるとか恥ずかしいぞ。姉さんも、ちっちゃい時しか撫でてこなかったしさ。

シユオルさんは神子に関してやりたいことがあるのだと、ちょこつとだけ話してくれた。

少々確認したいことがあって、その確認によってその後の行動も変わってくるのか。

「じゃあ、出発した神子に追い付くのが手っ取り早いんだ？」

「そうだな。だが、いいのか？」

「何が？」

「俺は急ぐ必要はない。神子に近づけば近づくだけ危険だ。お前は帰りたいんだろ？ わざわざ危険に近づきたくはないんじゃないか？」

「何も言わずこの道を選んだ人の言葉じゃないね？」

にやっと笑って言うてやると、シユオルさんは気まずそうに視線をそらした。

それだけ余裕がなかったってことなんだろうな。見るからに頭に血が上っていたし。

「……すま、冗談だよ。別に、俺はさっき並べられたことなら、特に危険だとは思わない。対処できるよ、大和もいるしね。それに帰り道に付き合ってもらってるんだから、シユオルさんに恩も返して

おきたいんだ。問題はないよ。」

「・・・そうか？」

「うん。」

「・・・・・・・・ありがとう。」

お、良い笑顔だね。美形だし、女の人が見たら騒ぎそうな感じ。気が抜けたような笑顔っていうの？

シユオルさん実はちよっと緊張してたのか。

ここで謝罪じゃなくお礼を言うのも、なかなか好感度高いよ？人付き合いを知ってるなあ。

「じゃあ少し急ぐ？」

「そうだな。辛くなったら言ってくれ。」

「りょーかい。」

ま、大丈夫だと思いたいね。人並み以上の体力はあるつもりよ、俺。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1791z/>

俺がちっさい訳じゃない！

2011年12月11日00時52分発行